

板垣明美

『癒しと呪いの人類学』

春風社、2003年

スマトラ島沖地震・津波では、被災者の心理的なケアの必要性も話題に上っている。では、伝統医療や土着の療法は、そこでどのような役割を果たしうるのか。そのような関心から本書を手にとってみたが、本書はそこからさらに広い世界へと導いてくれた。

本書は、現代医療の理論と技術がある種の病気をうまく治すことができる優れた知恵であるということをも認めた上で、それでは足りない「何か」を探してマレーシアとベトナムに思索の旅に出た成果である。マレー人農村に2年間住み込んでフィールド調査を行った著者によれば、マレー人農村では近代医療と民間に伝承された医療が並存しており、人々は病気によって治療法を選んでいくという。

心理的な問題解決という点で興味深いのは、著者が「悲しみの呪術」「愛の呪術」と呼ぶものである。これらの病気は大ボモによって治療される。大ボモは、呪術の手法を説明するのみで、それを誰がかけたかは説明しない。そのヒントを受けて、人々は心当たりのできごとを語り始める。こうして問題が解決に向かっていくという。

大ボモは、人を助ける手段として対抗呪術を用いることはあるが、呪術的な戦いを望んではいないという。加害者あるいは仕掛け人に対して直接的な処置をしないのが特徴的であり、著者に

よれば、この点はアフリカ研究者やインドネシア研究者には理解しにくいことであるらしい。

「なぜ呪術を仕掛けた加害者に暴力的な制裁を加えないのか」という謎は、著者が提出した博士論文で残されていた課題であり、この問題を追究した結果として本書が誕生した。著者が到達した説明は、医療とは相手を叩きのめしておしまいというような単純なものではなく、長期にわたる粘り強い交渉事であるというものであった。

この点に関連して興味深いのは、著者がマレー人文化を「殺さない文化」と呼んでいることである。病気は病人の身体の問題で済んでほしいと誰もが願っているが、ボモはそこから視点を180度転換し、呪術という論理を用いて病気をコミュニティの問題として対処しようとするのだという。マレー人社会では、このようにボモを通じて殺し合いを防止しながら人間関係の修正が試みられていると著者は結論付ける。そのうえで、このことはマレー人農村の呪術の世界に限らず、現代のマレーシア社会についても当てはまることが示唆され、政府のプロジェクトに対する農民の反応などの事例が紹介されている。

伝統医療や呪術療法に関心がある読者だけでなく、マレー人社会やマレーシア社会における人間関係に関心がある読者にも広く読まれるべき書籍であるように思う。 (山本博之)

佐藤考一

『獅子の町・海峡の風：
マラッカ 3 国の社会・文化・自然』

めこん、2004 年

本書は、インドネシア、マレーシア、シンガポールを「マラッカ 3 国」とまとめ、それぞれの社会の特徴を整理したうえで、この地域の文化や自然をまとめたものである。

本書も、「癒しと呪い」を中心的なテーマの 1 つにしていると言うことができる。インドネシアやマレーシアのドゥクンとシンガポールのタンキーを取り上げ、その実態を紹介して考察を加えている。インドネシアではスハルト大統領自らドゥクンを利用していた。また、シンガポールのように経済開発が進んだ国においても、HDB の 1 階の自宅の一部を改造して廟にしている例が見られる。これを著者は、人間の弱さと、それを克服しようとするあがきの現われであって、日本を含めて人間社会に共通する生き様を示すものであると結論付けている。それはまた、通信技術やファッションで世界の最先端に行くシンガポールの住民たちが怪談を好み、宝くじを当てるのに近親者の霊を呼び出そうとする姿とも重なるところがあるという。

本書は、著者が「マラッカ 3 国」をすみずみまで歩き、身体で感じてきたものを書き記したものである。それだけに、情報のディープさでは群を抜いている。マレーシアの全ての州でナシゴレンを食べ比べてみたり、マレーシア、インドネシア、

シンガポール各国の動物園を訪ねてオオトカゲへの餌の時間を比べてみたりと、本書は普通ではなかなか思いつかないような情報で溢れている。中国の鄧小平、台湾の李登輝、シンガポールのリー・クワンユーがいずれも客家の出自であるというのはよく言われることだが、さらに一步踏み込んで「この 3 人はいずれも客家方言が話せない」と見ているところが一味違う。唯一残念だったのが、この 3 国を「マラッカ 3 国」とする呼び方を本書ではじめて知ったが、その名前の由来については本書で説明がなかったことだ。これについては機会があったらぜひ伺ってみたい。

本書のもう 1 つの特徴は、類書に比して写真の点数がとても多いことである。ほぼ全ての項目にカラー写真が何点も入っているが、なかでも、各種スポーツの紹介では分解写真のように何枚もの写真で動きがわかるような見せ方をしてくれるし、動物の項目では紹介された動物それぞれに写真が添えられている。しかも、そのほとんどが著者自身の撮影によるものだという。マレーシア、インドネシア、シンガポールのさまざまな文物について、文献では知っていても実物を見たことがないという人にとっても本書はお勧めの一冊である。

(山本博之)